〔古今要覽稿 草木〕そめゑば　山礬

とちしば、一名そめしば、一名をしこめゑば、一名はいのき、一名やまき、一名しまくろき、一名くはい、一名あくしば、一名なもち、一名はなゑきみ、已上十名本草綱目啓蒙所載 漢名山礬は花信風大寒三候に配し、西土にては梅と共に稱して、梅是兄山礬是弟といひて稱すれども、皇國にてはいまだこの花を稱せず、山礬の名は宋の黃庭堅が名づけし物なり、山谷詩集に、江湖南野中有一種小白花、木高數尺、春開極香、野人號爲鄭花、王荆公嘗欲求此花栽、欲作詩而陋其名、予請名曰山礬、野人采鄭花葉以染黃、不備礬而成色、故名山礬といへども、山礬の名高くして、本草綱目にも山礬を先とす、佐藤成裕曰、肥後の人朝鮮の人に習ひて、この莖葉を燒灰汁となし、糯米を漬る事一宿にして飯となし、乾し、飴にてかため、果子とす、其色鮮黃にして美なり、故にこの木を方言あくしばといふ、本草綱目啓蒙あくしばの名あれども、何國の方言ともなし、又栗本瑞仙院の說には、山礬ゑやゝきと云、飯を染るは此葉なり、金黃色となる、是筑前の果子屋のなす所なりといへば、筑前にても製すると見へたり、本草綱目啓蒙には、山礬にて物を染る事は載せず、又松問栗答云、この書は黑田侯より草木鳥獸等の事を問答せし書にて、八九卷もあり、蒙贈示大歡不過之、山礬始てこれを視る、貴邦の土名トチシバ、又ソメシバなる由は兼て聞けり、貴邦に多くありと云によりて、一樹一本を乞奉るに、相州小磯驛小山、及武州神奈川驛の小山にて、先年御覽ありたる由、其地にて探索せば得易かるべし、其木を琻と見おぼへざればなり、今般其枝葉を親く見たるによりて、予は其樹を一覽せばそれと識ん、他人を以搜索せば、其方言も知らるべし、又冬春は形も異なるべし、搜索し難かるべし、唐山にては梅花水仙と幷に賞すと聞けり、花五瓣聚り開、香氣馥郁遠く人を襲ふ、故に七里香の名あり、今聞に本邦に此樹花さけるを近く嗅に香氣なしと、然れば別物乎、國異なるにより、貴邦のもの野梅と同時に花ありて、香氣の賞すべきもの有や、花狀の圖幷に其說をきかまほし、礬を不用して染もの